

益田市匹見埋蔵文化財調査報告第45集

(注)大田市匹見緑笹山Ⅱ工区緊急地方道路(改良)工事に伴う

雀堂遺跡調査報告書

2004年12月

島根県益田市教育委員会

— (主)六日市匹見線笹山Ⅱ工区緊急地方道路(改良)工事に伴う—

雀堂遺跡調査報告書

2004年12月

島根県益田市教育委員会

例 言

1. 本書は、島根県益田土木建築事務所の委託を受けて、匹見町教育委員会が平成15年度に行った
(主)六日市匹見線笹山工区緊急地方道路(改良)工事に伴う、雀堂遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、次のような体制で実施した。

調査主体	匹見町教育委員会(平成16年11月1日から益田市教育委員会)		
調査主任	匹見町教育委員会文化財保護専門員 (益田市教育委員会文化振興課埋蔵文化財調査専門員)		
			渡辺友千代
調査員	匹見町教育委員会主任主事 (益田市教育委員会文化振興課主任主事)		山本浩之
調査補助員	匹見町埋蔵文化財調査室 (益田市埋蔵文化財匹見調査室)		栗田美文
調査協力員	匹見町埋蔵文化財調査室 (益田市埋蔵文化財匹見調査室)		大賀幸恵 大谷真弓
調査指導員	島根県教育委員会文化財課		伊藤徳広
	山口大学人文学部教授		中村友博
	広島大学大学院文学研究科助教授		竹広文明

事務局

(平成16年10月31日まで)

匹見町教育委員会教育長	松本隆敏
匹見町教育委員会次長	大谷良樹
匹見町教育委員会主任主事	山本浩之

(平成16年11月1日から)

	益田市教育委員会文化振興課長		安達正美	
	益田市教育委員会文化振興課	文化財係長	木原光	
	益田市教育委員会文化振興課	主任主事	山本浩之	
発掘作業員	栗田修	森伊佐男	斉藤幸夫	大館高義
	藤井一美	平谷吾郎	田中 莫	宮市 勇
	渡辺姉友子	古原 延子	大谷 康詞	岡本 奈緒
遺物整理員	渡辺 聡	岡本 奈緒	初田 睦美	藤井 美樹
	大賀 幸恵	大谷 真弓		

3. 調査に際しては、島根県益田土木建築事務所匹見出張所の栗柄技師をはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただいた。また、山口大学人文学部の中村友博教授をはじめ、広島大学大学院文学研究科の竹広文明助教授から一方ならぬご教示を得たことに對し、ここに合せて感謝の意を表したい。

なお、発掘現場においては、土地所有者をはじめ、また地元の方々に終始多大な協力を得て、ここに報告することができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴状遺構—P、土坑状遺構—SKと略号している。なお、現場あるいは編集に掲載した現地図面は、益田土木建築事務所の協力を得た1/500の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用したものである。

5. 調査地点の所在地については、調査時に鑑みて旧住所で標記した。なお、出土した遺物または該当関係についての資料は益田市埋蔵文化財匹見調査室で保管している。

6. 編集にあたっては、前掲の調査員・調査補助員・遺物整理員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺が行った。

目 次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 地区の概況	2
第1節 地形的立地	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 調査概要	4
第1節 調査区の設定	4
1. 設定にあたって	4
2. 調査区の設定と実測	5
第2節 基本的層序と文化包含層	6
1. 基本的層序	6
2. 層序と文化包含層	7
第3節 遺物・遺構の出土状況	7
1. A 地区	7
2. B 地区	12
第4章 出土遺物	13
第1節 はじめに	13
第2節 実測遺物	14
第3節 おわりに	16

挿図・図表目次

第1図	位置図	1
第2図	位置と周辺の遺跡分布	2
第3図	地形断面図	3
第4図	調査区配置図	4
第5図	A地区土層図	5
第6図	B地区土層図	6
第7図	A地区遺構図	9～10
第8図	B地区遺構図	11
第9図	遺物実測図(1)	13
第10図	遺物実測図(2)	14
第11図	遺物実測図(3)	15
第1表	遺構計測表	7
第2表	遺物集計表	13

図 版 目 次

図版 1 鳥瞰からの調査地点域の風景

図版 2

1. 南からみた調査前の状況 (A地区)
2. 南からみた調査区設定状況 (B地区)
3. 北からみた a 区の上層部 (1・2層) の掘削状況 (A地区)
4. 3層暗褐色上中で捉えられた遺物の分布状況 (A地区 b区)
5. A地区の b区北壁周辺の完掘状況
6. B地区の b区西壁の堆積状況

図版 3

1. A地区の b区暗褐色上 (3層) に出上した剥片石器
2. 出上した 2 点の石器剥片 (A地区の b区)
3. B地区の暗褐色粘質土 (3層) に出上した炭化物
4. 暗褐色粘質土に出土した焼土塊 (B地区の a区)
5. A地区の b区に表出した上坑 (SK01・SK02)
6. 西からみた上坑 (SK02) の表出状況 (A地区の b区)

図版 4

1. A地区のSK02の土坑の半截検出状況 (南から)
2. B地区の b区に表出した柱穴状の P01
3. B地区のSK04上坑の半截による検出状況 (東から)
4. B地区のSK01・SK02上坑の完掘状況 (南から)
5. A地区の a区南半部の 3・4層々界面の状況
6. B地区の完掘状況 (東から)

図版 5

1. 実測遺物 (1)
2. 実測遺物 (2)
3. 発掘作業風景 (A地区)
4. 実測の作業風景 (A地区)
5. 「ふるい」による遺物採集の作業風景

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本事業は、島根県益田土木建築事務所（委託者）から「平成14年度以降県発注工事に伴う遺跡調査について」（益土第1199号 平成13年8月21日付）の文書を匹見町教育委員会（受託者）が受授した時点で発生したものである。

これを受け、匹見町教育委員会は14年度における該当地の工事予定地は問題はないものの、平成15年度の計画地においては指呼地に周知の遺跡が存在していること、また該当地は立地的にみても遺跡が分布している可能性が高いことなどを平成13年8月30日付（匹教210号）をもって通知したのであった。その後、委託者側から平成14年5月2日付（益土第560号）で協議したい旨のこゝを受けたので、同年5月22日付（匹教第61号）をもって試掘・工事立会箇所を図面を添付して送付し、また平成15年3月13日（匹教第351号）には同年4月3日から該当地に試掘（分布）調査に入る予定であることを回答したのである。

試掘（分布）調査は、平成15年4月14日から実施して同年5月26日に終了したので、その結果を同年5月27日付（匹教第80号）をもって1点（石器剥片）であるものの、人工遺物が捉えられたことを委託者側に報告したのであった



第1図 位置図

第2節 発掘調査の経過

試掘（分布）調査の結果をふまえ、文化財保護の立場から委託者側と協議を行ったものの、工法上の問題もあって記録保存とし、本調査は同年6月23日から実施することとなった。

調査は、まず試掘調査で文化遺物が確認することができた地点を中心に始めることにし、その分布状況を把握しながら地区設定、あるいは拡張していくといった方法で行った。文化層は3層の暗褐色土で捉えられたが、石器片はまったく確認できず、すべて石器剥片という奇異な出土状況であったものの、調査は同年8月22日には無事終了したのであった。

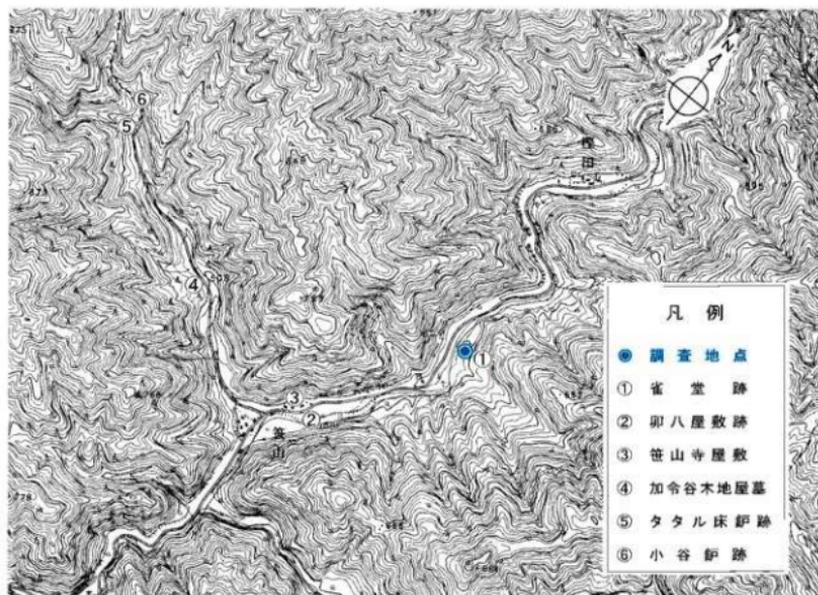
（渡辺）

第2章 地区の概況

第1節 地形的立地

調査対象地は、島根県美濃郡匹見町大字紙祖口841-2番地ほかに所在し、字名を雀堂（すずめどう）といい、表面標高は約428.8m（A地区）・425.8m（B地区）を測る2地点であった。

該当地は南東から北西方向に流下する紙祖川の右岸にあり、東側には獅子口（1091m）と俗称する山塊が北西側に向かって緩やかに紙祖川に向かって派生した山裾に当り、そして紙祖川との比較差約4mばかり測る河岸端に立地する。また対岸の南西側は急峻な山地が紙祖川にせまっていて、そこを主要地方道の六日市匹見線が紙祖川沿いに通貫している一方、周辺には民家もみられず、落葉広葉樹を中心としたナラ帯に覆われているといった環境下にある（第2・3図・図版1）。

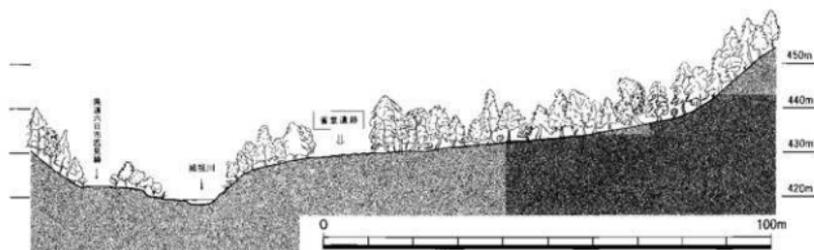


第2図 位置と周辺の遺跡分布図

第2節 歴史的環境

本地区（大字紙祖字笹山）における遺跡は乏しい。それは重畳たる山地中であって平地が少なく、古くから人文活動が低調であったということにあらうかと思われる。現在、1.3km南東側の紙祖川に加令谷が相会する笹山集落には4戸が現存していて、そこには近世期を中心とする遺跡などが数箇所

分布している（第2図）。因みに三葛組の組頭であった卯八屋敷、そして笹山寺屋敷がそうである。また製鉄遺跡のタタル床跡・小谷跡、そして加冷谷の本地屋敷などがみられるが、これは前述したとおり山地で、しかも狭地であるという本地の立地性に沿った特徴的な遺跡ということができよう。



第3図 地形断面図

さて、調査地点の東300m山裾には周知の遺跡である「雀堂」が存在しており（第2図）、地元の人たちはこれを鳥害としての雀封じのために祀った小祠跡であったといっている。またその南側の餅ヶ谷という谷筋が西流してつくった緩やかな谷地を形成しているが、そこには畑地や古墓などが点在し、古くは生活の営みがあった様子が窺われるのである。

『永源寺町史』—本地師編上・下巻—（永源寺町史編纂委員会・平成13年3月31日発行）の氏了駈帳（明暦3年）によると、本地には本地職人の戸数3軒があって21人がいたことが確認される。また同じく寛文5年（1665）のものには7人の名が初穂などの冥加金を奉仕したことが記されており、該当城は少なくとも近世初期には餅ヶ谷（餅賀谷）といわれていて、人家が存在していた場所だったようであり、これを証明するかのように、現地では近世期のものと想定される陶磁器片も採集されているのである。

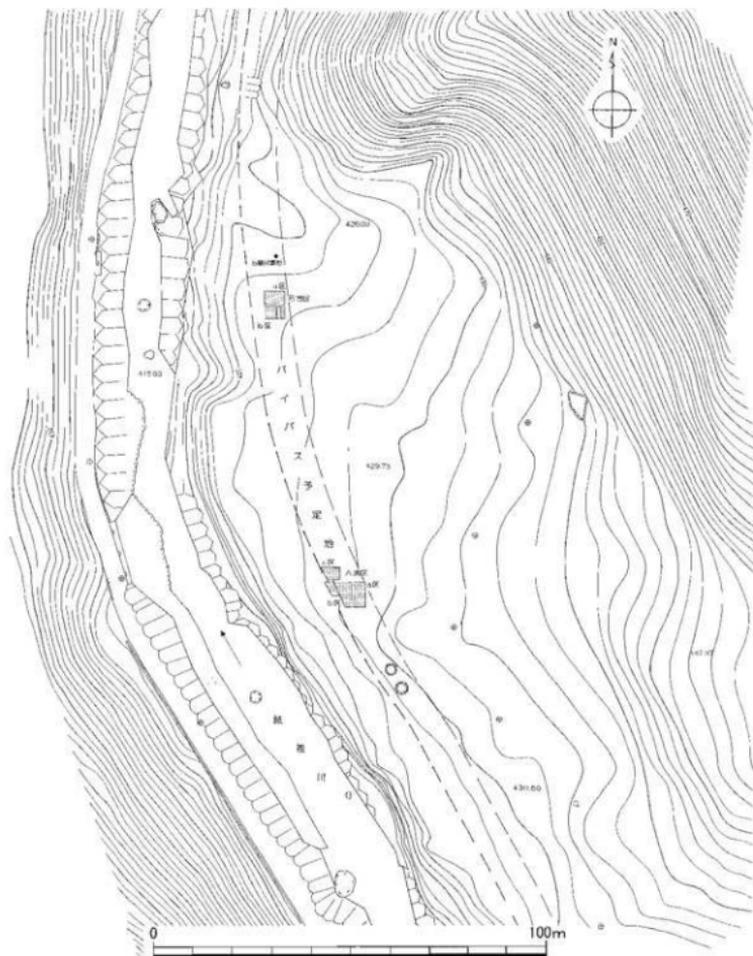
（渡辺）

第3章 調査概要

第1節 調査区の設定

1. 設定にあたって

現地の工事予定地内の覆い茂る樹木などは取り払われていたものの、ブルドーザーなどの重機の往



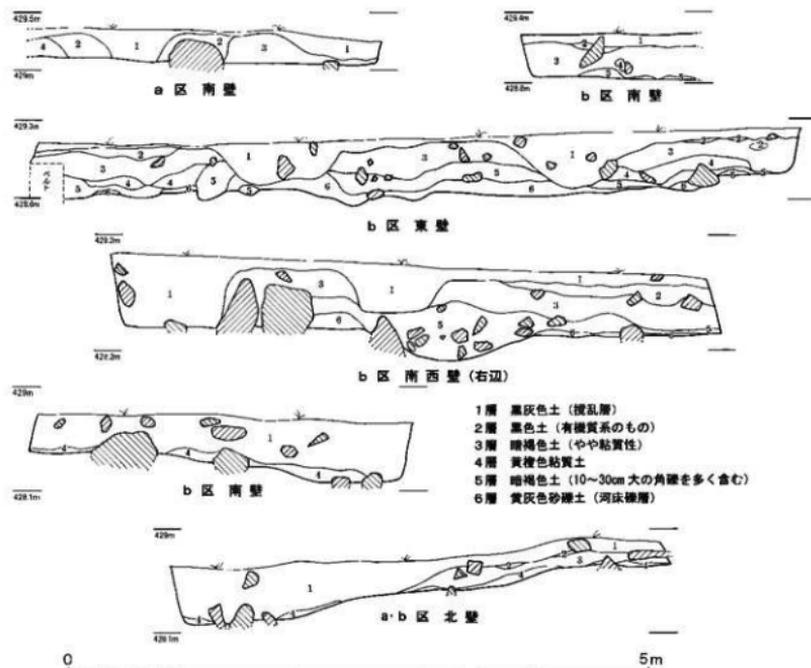
第4図 調査区配置図

米で地表は荒らされていて、調査地としてはけして満足できる状況ものではなかった（図版2-1・2）。

調査に当たっては、まず平成15年度に実施した試掘（分布）調査において、1点であるものの石器剥片が確認された地点に、A地区と称するものの範囲を定めることから始めることにした。そして下流の北西側約100m測る地点（小谷が横切る場所）において石鎌1点が採集されていたので、その地点から約20m測る手前（南東）側にB地区を称する調査地点名のを設けることにし、つまり「A地区」「B地区」とした調査対象地点をまず選定することから調査区の実測に入ることにしたのであった。

2. 調査区の設定と実測

A地区における調査区の設定にあたっては、試掘調査において表面採集された地点を中心に、それを圍繞するように設定していたため、本調査ではそこに充填状に設定したのであった（『凡見町埋蔵文化財調査報告書第44号』・第7図）。基本的には磁北方向を基準にして設定しようとしたものであるが、人工遺物が捉えられた地点域と、工事予定域との区画範囲が不合理であったために変則的な遺り方となってしまった。なお、調査区はa・b・cという地区割をし、その調査面積は約61㎡を測るものを設定したのである（第4・7図）。



第5図 A地区土層図

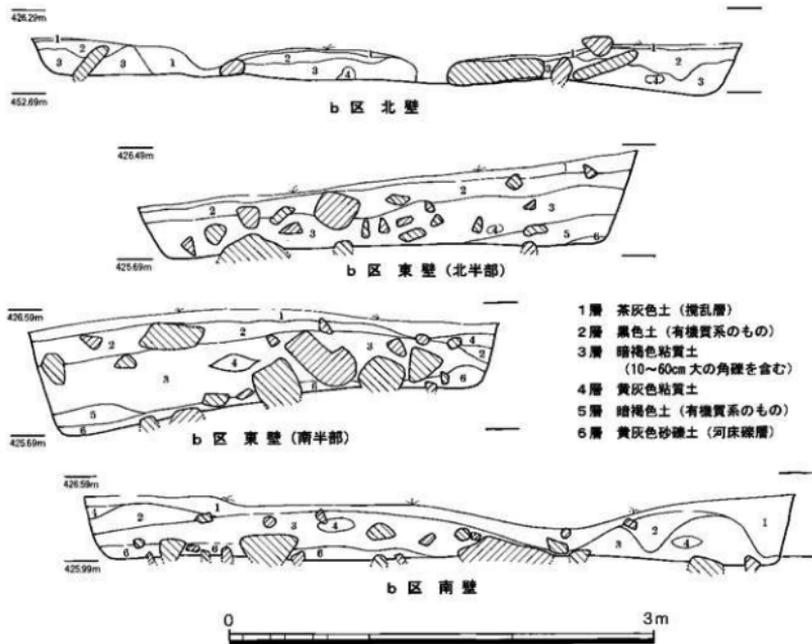
またA地区から下流の北北西側に約80m隔てて設定したB地区のものは、紙祖川へと横切って流れ込む谷筋で採集された石礫（第4図）の発見状況や、また地形的立地などを考え、任意に磁北方向に7m、東—西方向に5mを測る調査区とし、それをさらにa・b区と地区割して設定した（第4図・図版2—2）。

なお、現地表面標高は凡そ425.8m前後を測って、A地区よりは約3m低位の調査地点のものであり、その調査面積は35㎡のものであった。

第2節 基本的層序と文化包含層

1. 基本的層序

A地区の基本的層序は、上部から1層の黒灰色土、2層の黒色土、3層暗褐色土、4層黄褐色粘質土、5層暗灰色土、6層の黄灰色砂礫土の順で堆積していたことが看取されたものの、尖滅するものや間欠した層などがみられ、穏当な堆積状況ではなかった。とくに上位層がそうで、これはブルドーザーなどの重機による作業による影響も多少みられたが、多くの原因は第2章の第2節で触れているように、本地では少なくとも近世前半期における人影の様子が窺えることから、それらの人為的行為に主因があったものと想定したのである（東壁・南壁）。そして地形が北西側の紙祖川に向かって



第6図 B地区土層図

緩傾斜している関係から、部分的によっては“地すべり”状況を呈した層序もみられた（第5図）。全体的に上位層の黒色系のものは下草や落葉などの有機質系の土壌で、4層以下は山土の黄色系で形成され、人頭人の山石が多くみられた。

またB地区の層序は、A地区のものよりは乱れはみられず、1層の茶灰色土、2層の黒色土、3層暗褐色粘質土、4層黄灰色粘質土、5層暗褐色土、6層黄灰色砂礫土というように堆積していた（第6図・図版2-6）。該当層序は基本的にはA地区のものと同差はないものの、ただ粘質系のものが顕著であり、そして50cm大の火石（山石系）を多く含んでいたという差異がみられたのであった。

2. 層序と文化包含層

A・B地区のいずれとも遺物包含層は3層の暗褐色系の層位で捉えられたが、遺構は3層と4層の黄橙（A地区）～黄灰色（B地区）系との層界面に検出された（第7・8図・第1・2表・図版4-1・-2）。A地区でみるかぎり、遺物の多くは3層上位部で捉えられたものが多いことから、したがって遺構は3層上位部から構築されたものであったと思われる（第2表）。

第3節 遺物・遺構の出土状況

1. A地区

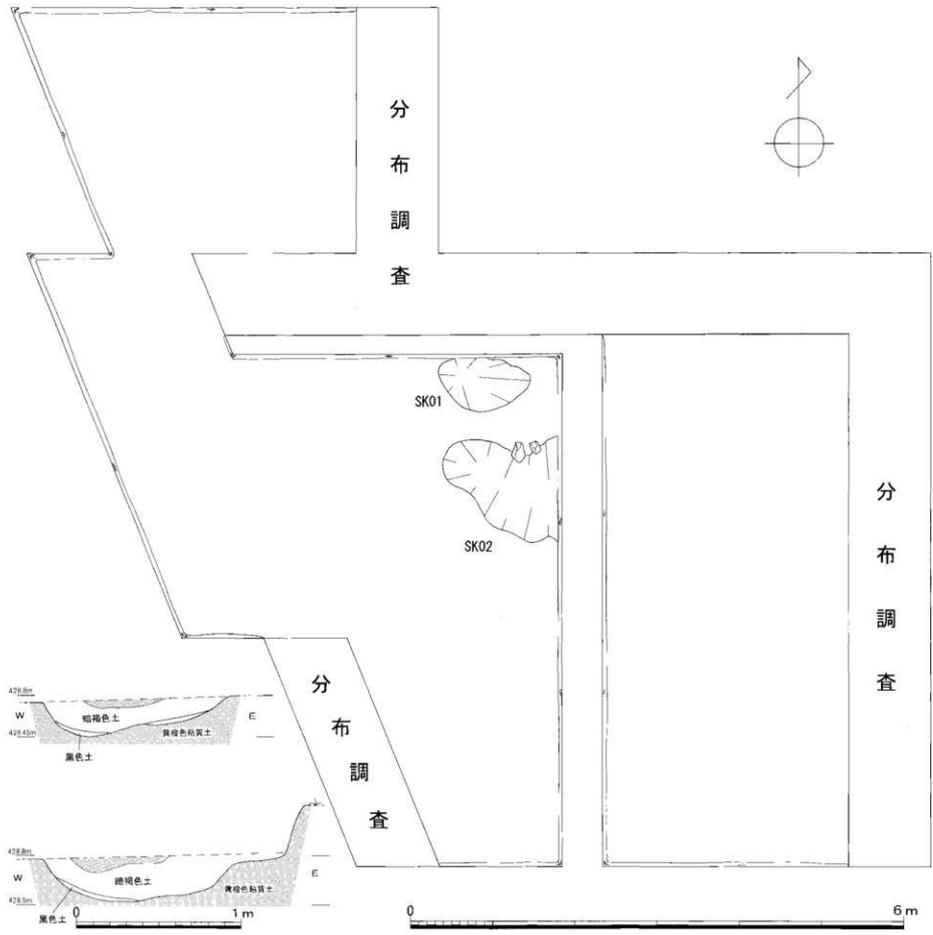
出土遺物のほとんどは石器の剥片で、他に陶磁器片（4点）や礫石、焼上片（1点）など表面採集を含め101点が確認されている（第2表）。

	遺構No.	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	表出面標高(m)	備 考
A地区	SK01	114.0	61.0	21.0	428.770	
	SK02	—	—	27.0	428.790	炭化物少量
	P01	24.0	19.0	24.0	429.370	
B地区	SK01	61.0	44.0	11.0	429.480	
	SK02	453.0	29.0	13.0	429.460	
	SK03	91.0	38.0	18.0	429.410	炭化物・焼土少量
	SK04	178.0	50.0	18.0	429.410	
	SK05	68.0	25.0	15.0	429.440	炭化物・焼土少量
	SK06	124.0	47.0	22.0	429.370	炭化物・焼土少量

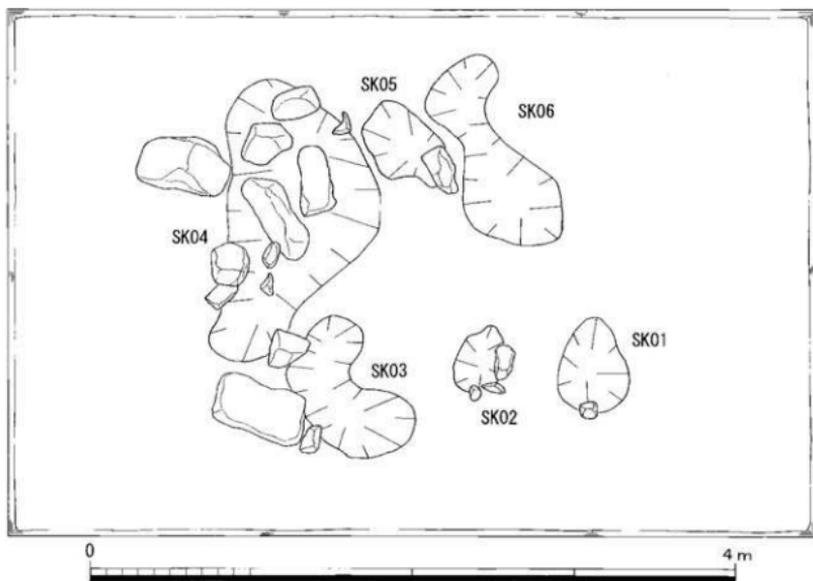
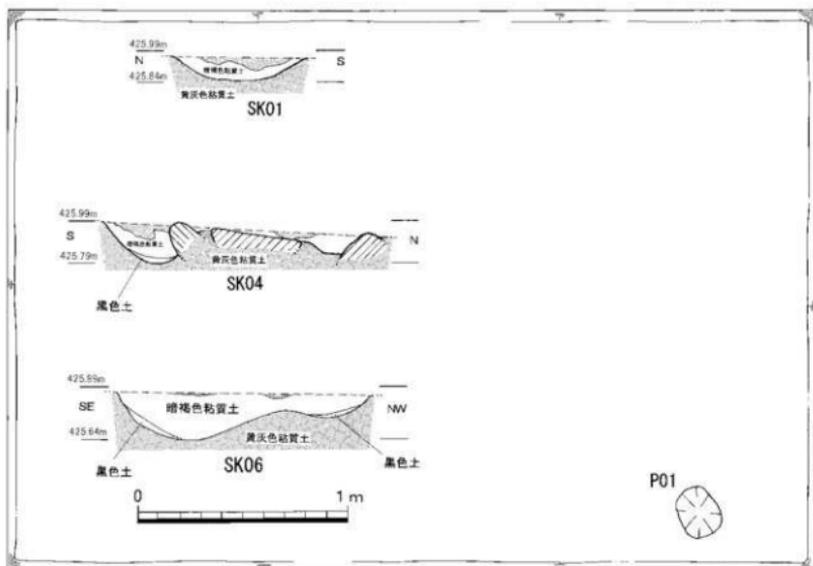
第1表 遺構計測表

A地区においては、実測のものや“ふるい”によって得られたものは3層暗褐色土中のものであったことから、石器剥片などの採集の縄文遺物も該当層に包含していたものと考えられる。またB地区においては3層では認識できたものはなかったものの、3層と4層との層界面に明確な遺構が検出されていることから、該当層が文化包含層であったと想定している。ただし1点の土器片も確認されていないということが問題で、したがって具体的な時期的位置付けができないということにあるが、A地区においては素材の母岩や石核（石核石器は別）は確認されなかったものの、b区の西半に集中するといった出土状況、しかもこれらが砕・剥片のみということからみて、石器製作場所であった可能性が高いということだけはいえそうである。

遺構は、楕円形のもの和不整形の土坑状のもの2基が検出されており（第2図・第1表・図版3-5・6）、これらはいずれも3層と4層の層界面であった。そして坑内には3層暗褐色土が大部分であったが、下部には2層の黒色土の陥入もみられ、またSK02では少量の炭化物が検出されているが、伊跡と断定できる状況のものではなかった。なお石器剥片等は、当遺構の西半部（b区）で大半ものが出上したのであった。



第7図 A地区遊構図



第 8 图 B 地区遺構図

2. B 地区

B地区においては出土遺物の皆無（暗褐色粘質土において）的な状況から、遺跡の性格・時期ともはっきりしなかった。しかし焼土・炭化物を含んだ明確な遺構（第8図・第1表・図版4-3）が検出されていることから、文化期が存在していたことは間違いないものとする。これらはいずれも4層（黄灰色粘質土）に嵌入して検出したものであり、遺構内には3層の暗褐色粘質土が嵌入していることからみて、構築の主体は3層内に形成されていたものと考えられる。

遺構としては土坑状のもの6基、ピット状のもの1基が検出されたうちのSK03・SK05・SK06では炭化物、そして強い被熱状況を示す焼土が確認（図版3-3・4、4-3）されていることから、これらは屋外炉であった可能性がある。ただ4層に陥入する遺構も多くは浅く、そして調査区域内には50cm以上の大石や礫石が填充していて、精査できなかったというのが実情であったのである。

（渡辺）

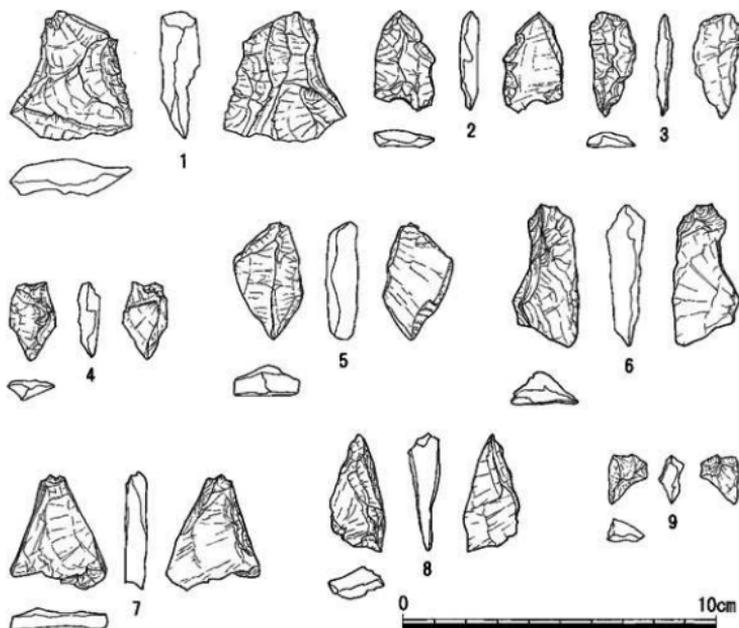
第4章 出土遺物

第1節 はじめに

調査区においての遺物の採り上げについては、1・2層は攪乱的な様相を呈していたので、一応層名を便宜上記すのみとし、3層からは原位置法式で行うとともに、さらに該当層を視覚的な判断をもとに上部と下部に細分するといった方法で行った。

調査区	出土区	層位	層	層部	標形	2次加工片	石核(燧石)	砕片・剥片	打製石片	磨製石片	礫石(石器)	焼土片	陶磁器	合計		
A地区	A地区全面	採集	1層		1			9		1				11		
			a区	1層					2	1		1		2	4	
	b区	採集	1層			1			5			1			3	
			3層上位部(少しい)		1	0			22			2			31	
			3層上位部(少しい)		1				6							7
			3層下部部						13		2					15
			3層下部部(少しい)			1			12			1				14
	c区	1層									1			1		
	B地区	B地区全面	採集	1層				1	3						4	
				a区	1層					1						1
b区				1層								1		2	4	
小計				1		0	1	1	74	3	1	6	1	4	101	

第2表 出土遺物集計表



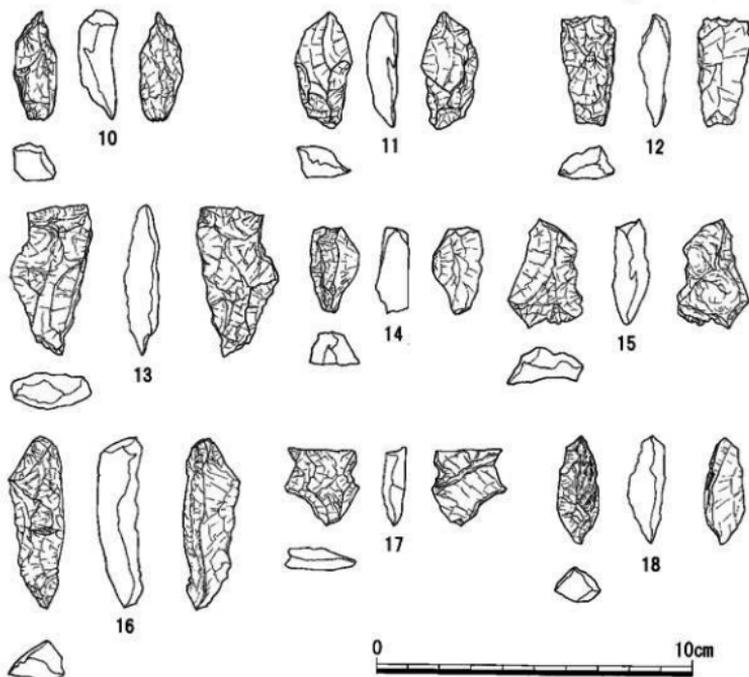
第9図 遺物実測図(1)

これらの出土遺物の具体的な層位や種別については第2表のとおりであるが、その101点（A・B地区の合計）の中でも最も多かったのは石器剥片・碎片の74点であった。それらのうちの大半は3層から出上した53点（A地点）で、残り21点は表面採集や捜乱ともいえる1層、または不明確な廃土からみつかったものである（うち5点はB地区）。そして削器・楔形などの剥片石器が8点、打製石斧片と思われるもの2点、礫石器かと思われるもの3点が3層から出上しているのみで、はっきりとした正規的な利器といえるものは確認することができなかったのである。

実測は、本遺跡の特徴が顕れていると思われるものを採り上げて実測しているが、残りの大半のほとんどは1cm前後程度の剥片・碎片ばかりであることを前置きした上で、以下若干のコメントをしておきたい。

第2節 実測遺物

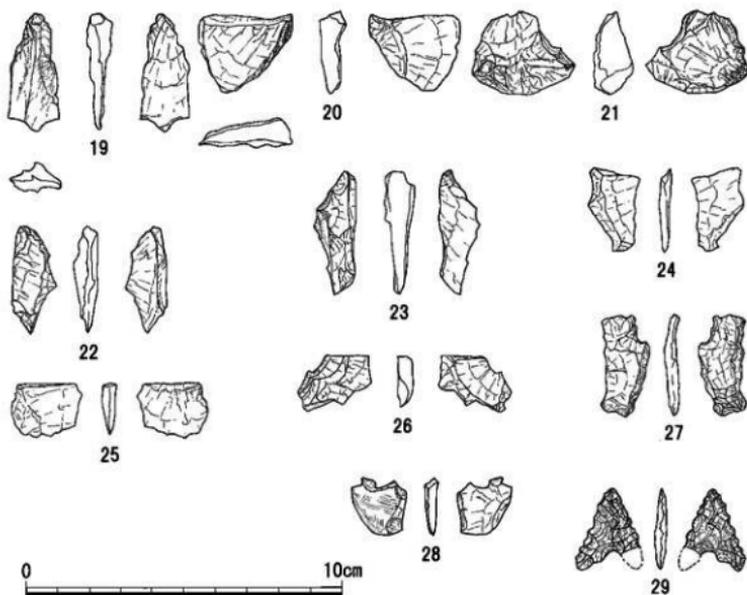
1～4は剥片石器、あるいは二次加工が施されているもので、そのうち1はA地区（以下は29を除くすべてが該当地区のものである）の3層上位部に出土したものの。片面側の表裏に阻い剥離面がみられることから、剥離石核状を利用した不定形の削器ともいえるもの。重量は14.1gを量り、本遺跡に



第10図 遺物実測図(2)

おいては大振りといえるもの。2は、1と同様の安山岩質（以下は28の粘版岩、29の黒燐石以外すべて安山岩質の石材）のもので、表面下方に扶人状の片面剥離がみられるもの。3は横長状の剥片で、薄く片辺に向かって剥離した様子が窺われ、その面が刃部として使用されたものだったかもしれない。4は、菱形の剥片石器で、下方側の片面に極浅形のもと捉えられる剥離面がみられる。

5～14は、楔形の剥片石器類であるが、うち5は両端からの加撃がみられることから楔形といえるものであるが、一部に加工面状況が窺われることから、彫器の可能性もある。6の断面は三角形をなし、重量は7gを量り、本遺跡では大振りのものといえるもの。7は両極から加撃し、扁平な剥片をつくり、うち2先端を欠いて加工らしき跡が窺われる。8のものは、1側辺に自然面が残ри、その生成状態や石質等から肉眼観察であるものの、冠山産出の角閃石質安山岩と思われる。13は10.3gを量るもので、表面採集されたもの。



第11図 遺物実測図(3)

15～28のものは、剥片もしくは碎片といえるもの。ただし、15～18のものは両極剥離的な形状からみて、楔形石器の可能性も残す。このうち16は9.3gを量り、断面は長三角形なし、尖った1側部は利器的機能の様相を示している。18の断面は菱形をなし、縦に4本の稜線が走り、その側面には自然面が見られる。21は、不性質的な石質で、不規則な裂破したと思われる碎片。24は1.1gを量る小片の剥片。28は、表面採集された1gを量る粘版質系の細片。表面には研磨された擦痕が明瞭なもので、おそらく磨製石斧の刃部の碎片であろう。

29は、B地区付近で表面採集された黒曜石（黒色）の石鏃。挿入基部の両端のうちの片方は損欠しているものの、表裏面の稜線に向かって均等のとれた丁寧な剥離を施した美形といえるもの。

第3節 おわりに

意識した二次的加工のものは数点と極めて少なく、大半は1cm前後の剥・破片で、敢えて規格的といえるものといえば、楔形の剥片石器が10数点みられたに過ぎない。これらの剥・破片類には土器を伴っていないことあって、しかも剥片を中心とした資料では石器製作のパターン性から時期を読みとろうとしても難しいが、総合的に捉えていうならば縄文時代後期以前、それも早期を遡らない時期のものではないかと仮定しておきたい。ただ、母岩や石核は確認することはできなかったものの、それらが石器製作時に生じたものであったということは看取できることから、したがって石器製作場ではなかったか、ということだけはいつでもよかろう。そして近隣に該当のものに関係する人影の跡、遺物があるに違いないと想定できたことも、今回の一つの成果であったことを付言しておきたいと思う。

(渡辺)



鳥瞰からの調査地点域の風景

図版 2



1. 南からみた調査前の状況 (A地区)



2. 南からみた調査区設定状況 (B地区)



3. 北からみたa区の上層部(1・2層)の掘削状況 (A地区)



4. 3層暗褐色土中で捉えられた遺物の分布状況 (A地区b区)



5. A地区のb区北壁周辺の完掘状況



6. B地区のb区西壁の堆積状況



1. A地区のb区暗褐色土（3層）に出土した剥片石器



2. 出土した2点の石器剥片
（A地区のb区）



3. B地区の暗褐色粘質土（3層）に出土した炭化物



4. 暗褐色粘質土に出土した焼土塊
（B地区のa区）



5. A地区のb区に表出した土坑
（SK01・SK02）

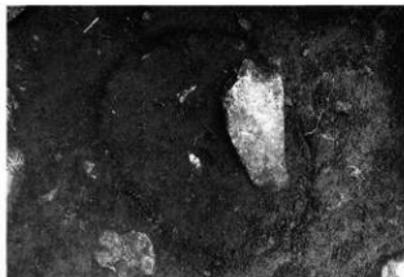


6. 西からみた土坑（SK02）の表出状況
（A地区のb区）

図版 4



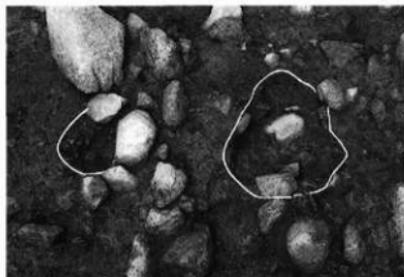
1. A地区のSK02の土坑の半截検出状況
(南から)



2. B地区のb区に表出した柱穴状のP01



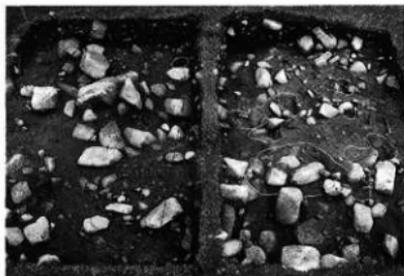
3. B地区のSK04土坑の半截による検出
状況(東から)



4. B地区のSK01・SK02土坑の完掘状況
(南から)



5. A地区のa区南半部の3・4層々界面
の状況



6. B地区の完掘状況(東から)



1. 実測遺物 (1)



2. 実測遺物 (2)



3. 発掘作業風景 (A地区)



4. 実測の作業風景 (A地区)



5. 「ふるい」による遺物採取の作業風景

平成16年12月16日 印刷

平成16年12月28日 発行

益田市匠見埋蔵文化財調査報告第45集

— (主)六日市匠見線善山Ⅱ工区緊急地方道路(改良)工事に伴う—

雀堂遺跡調査報告書

発行 益田市教育委員会

島根県益田市常磐町1番1号

印刷 株式会社 谷口印刷

島根県松江市東長江町902-59
